三　「歴史」の部分について

木　幡　藤　子

私自身、旧約釈義のために聖書のテクストを訳したり、ドイツ語の研究書を訳した経験を通して、ひとつの文化体系の中の言語作品を翻訳することはそもそも不可能であり、しかもその作業は非常に労苦の多いものであることを思い知らされている。したがって、もし私が訳したなら、どんなものが出来上がっていただろうかと考えると、筆はここで止まってしまうのだが、それでは与えられた課題を果たせない。

さて割り当てられた範囲は「歴史」つまり、モーセ五書から律法を除いた歴史物語と列王記下までの歴史書であり、[1] 極めて多量である。とても全体を取り上げることは出来ないので出エジプト記一―一八章をサンプルとして、この部分を中心に検討していくことにする。[2] 担当範囲に属す、最初の創造物語（創一・一―二・四）の詳細な検討が松田伊作氏によりすでになされている。[3]

以下で（一）口語訳に較べ良くなっている点、（二）日本語の問題として二人称の代名詞と丁寧語、尊敬語、謙譲語を検討した後（三）訳の諸問題を取り上げる。

一、口語訳では章節の数え方がヘブライ語聖書と一致しない箇所が幾つかあったが、それが訂正されている。その一覧表が旧約・新約聖書大事典（一九八九年、教文館）の二〇頁に「口語訳・ヘブライ語聖書（＝新共同訳聖書）章節対照表」として載っている。

これは印刷の組み方の問題だが会話の場合、話し手が変わると行が改められているので読みやすくなっている。

語呂合せがある場合ヘブライ語を記したり、ヘブライ語の意味を補っているので、名前と出来事や事物の関連が理解できるようになっている。「王女は彼をモーセと名付けて言った。『水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。』」（二・一〇。創一七・一七、一九を参照）。しかしヘブライ語の母音の長短が正確に記されていない場合がある。ドイツ語などと違って日本語のかなは母音の長短を表記できるので、両者を区別すべきである。創二・七のアダムとアダマはそれぞれアーダームとアダーマーであり、二・二三のイシャーとイシュもイッシャーとイーシュである。

二、二人称の人称代名詞はヘブライ語で相手が男性か女性かそして単数か複数かによって変わるが、日本語では例えば相手が男性単数であっても「あなた、お前、君」などの可能性がある。さらに複数の場合これらに「たち」をつけるか「がた」をつけるかという問題もある。したがって、当事者間の間柄により また同じ人の間でも関係が変化していく場合には場面によって訳し分ける必要がある。

新共同訳では神がモーセに語るときも（四・一〇）、モーセが神に語るときも（一二節）口語訳と同様「あなた」が使われている。関根訳は前者を「君」、後者を「あなた」と訳し分けている。

エジプト王の「産婆」への言葉には口語訳の「あなたがた」より新共同訳の「おまえたち」のほうが適している（一・八）。

家族の中で父が娘たちに「おまえたち」と言うのも妥当だろう（二・二〇）。姑の嫁たちへの言葉では口語訳の「あなたがた」より新共同訳の「あなたたち」がよいが、「おまえたち」としては親しすぎるだろうか（ルッ記）。夫が妻に「あなた」（新共同訳）と言うより「おまえ」と言ったほうがよそよそしくない感じを私は受ける（サム上一・八）。関根訳はここでも「君」としている。

丁寧語、尊敬語、謙譲語は日本語に特有でヘブライ語にない。だから訳文においても全く用いないという立場も可能である。松田氏は上述の論文でその立場を貫いている。評者は訳文にこれらがある程度入るのは日本語として仕方ないが、少ないほうがよいと思っている。

口語訳が目上の者の目下の者への言葉の中に丁寧語を使っているのを新共同訳は訂正している。エジプト王が「助産婦」に「生かしておきなさい」（口語訳）と言うより「生かしておけ」と言うほうが自然である（一・一五）。フォラオの娘がエジプトに寄留しているヘブル人の女に「飲ませて下さい。……わたしはその報酬をさしあげます」（口語訳）と丁寧語と謙譲語を使うよりは「飲ませておやり、手当てはわたしが出しますから」というのも同様である（二・九）。

ヘブル人どうしの喧嘩のなかでの言葉から丁寧語が消えているのも自然である（二・一四）。「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。……殺そうと思うのですか」（口語訳）。「だれがお前を……したのか。……殺すつもりか」（新共同訳）。

それと逆に新共同訳で丁寧、尊敬、謙譲の度合いが格段に強まっている例が王と臣下の間に見られる（サム下一二・一八）。「子のなお生きている間に、われわれが彼に語ったのにかれはその言葉を聞き入れなかった。どうして彼にその子の死んだことを告げることができようか」（口語訳）。「お子様がまだ生きておられたときですら、何を申しあげてもわたしたちの声に耳を傾けてくださらなかったのに、どうして亡くなられたとお伝えできよう」（新共同訳）。

ミアデンの祭司と娘の会話の中でも尊敬語が加わっている（二・一九）。「……飲ませてくれたのです」（口語訳）「飲ませてくださいました」（新共同訳）。

つぎに神について述べる場合だが、口語訳と新共同訳で同じ程度の尊敬語が使われているのが創一七章である。「現れて言われた」（一節）、「言われた」（三・九・一五節）。創一八・一では例外的に新共同訳のほうが尊敬語を使ってないのはおそらく同音が重なるのを避けたためであろう。「現れられた」（口語訳）、「現れた」（新共同訳）。

神が主語の動詞 ʾmr、dbr を口語訳は訳し分けずほとんどいつも「言われた」としている。新共同訳は ʾmr は通常「言われた」（七・一・八・一四・一九・二六等）と、そして dbr で神が主語のある場合を「仰せになった」と訳す（六・二・一〇・二八、七・二二、八・一一・一五、九・一二・三五、民一・一・四八、二・一等）。この動詞は擬古的であるだけでなく「言われた」にくらべ尊敬の度合いが強くなっている。新共同訳が神について尊敬語を強める傾向は創造物語に端的に表れている。口語訳の「見られた」（創一・三一）、「休まれた」（二・三）、「雨を降らせず」（二・五）、「言われました」（三・三）が「ごらんになった」、「安息なさった」、「雨をお送りにならなかった」、「おっしゃいました」となっている。

このように口語訳に較べよくなっている場合もあるが、逆の現象も見られる。特に神についての尊敬語の程度は強められており、過剰気味である。これは神と人との関係をどう理解するかということに関わる問題である。尊敬語を多く使うことは神と人間を上下関係におき、両者の距離を一方的に強調するが、神がその距離をのりこえて人間と深く、濃やかに係わるという面をないがしろにすることになる。ちなみにルター訳では神が人間に語るときも人間が神に語るときも人間どうしの言葉でも全て二人称の敬称ではなく、親称が使われている。

三、神名を「主」と訳しているが、それにより不都合な事が生じている。（一）自己紹介での「わたしは主である」（六・二）や「主という名を知らせなかった」（三節）が意味をなさない。（二）ヤハウェとその短形ヤハ（一五・二）の区別が出来ない。（三）原文で名詞の「主」となっているのとの区別が出来ない。サム上一・一五で「わが主よ」（口語訳、関根訳）を「祭司さま」と訳しているのは神との混同を避けたためであろうか。

口語訳の訳語のほうが正確の場合がある。（一）トーエバーという語は祭儀的、道徳的にうけいれられないという意味で、八・二二の問答でも祭儀が問題なのだから、「忌むもの」（口語訳）の方が一般的な「いとう物」より適切である。（二）九・二二―二五でベヘーマーもミクネー（一九―二一節）同様「家畜」と訳されているが、前者は「動物、獣」をも意味することができる。ここでは「動物」を意味し、雹が人も動物も植物を

もうったとなっている。この語をここで家畜と訳しては九・一―七で家畜が疫病で死んだのに何故すぐ次の災いで再びうたれることになるのかという疑問が生じる。口語訳は「獣」なのでこの矛盾がない。(三) 七・一九bはエジプト全土の水が血に変わるということで直訳すれば「木や石の中にも血があるだろう」となる。その意味が木や石の器の中の水までというのか(口語訳)、それとも樹液や石にたまっている水までかという点で見解が分かれている。しかし新共同訳のように「木や石までも血に浸る」では血が洪水となって浸水してきたかのようである。二一節bにも同じ問題がある。

テクスト批判上支持出来ない訳が八・一九にある。マソラ本文では「贖いを置く」、七十人訳に従えば「区別する」である。この両者を結びつけて新共同訳の「区別して贖う」という訳が生まれたのだろうと推定されるが、テクスト批判上どこにも存在しない読み方である。

日本語としてなめらかに読めるようにするということがひとつの重要な原則となっているようである。その結果、原文のある語が省略されている。(一) 二・二四―二五では「神が」が四度出てくる。最後のはテクストを読み変えることも可能なので、それを除くと三度になるが、二度しか訳出されていない。ここは祭司文書が神名ヤハウエを導入する(六・二)直前で「神が」をわざと繰り返しているのである。(二) 似た事が六・六にも見られる。六―七a節でヤハウエを主語とする一人称の動詞が五つ重ねられており、それぞれに「あなたたちを／に」が続いているのだが、「奴隷の身分から救い出す」の「あなたたちを」が省かれている。(三) 七・二でも「わたしがあなたに命じるすべてのことを」の「あなた」が抜けている。ここでは、神が神・モーセ・アロン・ファラオの関係を規定するだけでなく、語る内容までも決定すると、神の関与が特に強調されているのである。以上の三例がいずれも祭司文書に属すのは興味深い。繰り返しの多い、くどいともいえるPの文体が訳文には残されていない。(四) 一〇・一七では、罪の赦しを求めるときに通常出てくる「今」(創五〇・一七、出三二・三二、サム上一五・二五)に更に「もう一度だけ」が加わって「この一回限りの」ということが特に強調されているが、二つ重なるとくどいからか、新共同訳では「今」が抜かされている。

逆に原文にないものを補って訳文をなめらかにしている場合もある。(一) 二・二三はひとつの節の中で文書資料が交代しており、つながりが悪い。新共同訳では二番目の冒頭に「その間」を補って、それをカバーしている。(二) 一八・一では「主がイスラエルをエジプトから導き出されたこと」がつながりがわるいこともあり通常付加と判断される。原文にない「すなわち」が訳文では置かれている。

人間の神格化を恐れて、表現を和らげて訳しているのが四・一六、七・一である。原文ではともにモーセについて「神となる」、「神とし」だが、「神の代わりとなる等」と訳されている。

口語訳も同様の傾向を示す。ここの前後関係では役割が問題なのであり、その役割を決めるのは神であることが明瞭なのだから、原文をそのまま訳してもモーセの神格化の危険はないと思う。

一六・四bの「わたしの指示どおりにするかどうか」ではかなりの意訳をしているので、「わたしの律法に歩むかどうか」という申命記的・申命記史家的表現が姿を消している。

段落を切ってそれに表題をつけているのは読者が内容を理解するのに役立つが、この作業も当然テクストの解釈なしにはなされえない。問題の箇所を列挙する。(一) 新共同訳は一・二二を二章の方につけ、新しい段落の始めとしている。しかしこのつながりは、ファラオが「助産婦」にひそかに命じてヘブライ人の男児を殺そうとしたが成功しなかったので、全国民にその男児殺しを公然と命じた、そういう状況の中でモーセが生まれたとなっている。やはり前との関連が強いので、ルター訳や関根訳や注解書(ノート、シュミット)のように一章に続けるのが適切である。(二) 二・二三aβbをその内容に応じて三章の「モーセの召命」の導入部分としてもよいと思われる(関根訳)がそうしていない。(三) 一三・一七—二二を独立の段落としているが(ルター訳も)、一三・一七からすでに「海の奇跡」がはじまっているので一四章に付けた方がよい。

段落の表題は内容をどう理解するかを明瞭に示している。ここでも問題があると思われるものをあげる。(一) 七・一四—二四は今の話では新共同訳の通り「血の災い」でよいが、資料分けを考慮に入れれば、水が血に変わる奇跡とナイル河の魚が死んで水が飲めなくなるというものなので「水の災い」とした方がよいだろう。(二) 一四章の表題が「葦の海の奇跡」となっている。しかし、「葦の海」も出てくるが、——それは新共同訳の区切りでは別の段落においてである(一三・一八)——一四章では海べないし海べの特定の地点が奇跡の舞台なので(二、九節)、単に「海の奇跡」とした方がよい。(三) 一五章の歌の表題も、海の奇跡については一〇節ないし一一節までそれ以後一八節まではカンナへの定住についてなので、「勝利の歌」(関根訳)ないし「ヤハウェの勝利」の方が新共同訳の「海の歌」よりよい。(四) 次の一六章はマナについて主として物語られているが、うずらも登場するので、出てくる順に従って「うずらとマナ」の方が「マナ」だけよりよいだろう。

ある語をどう訳すかでも解釈の問題にぶつかる。新共同訳は六・五の 'bd ヒフィル形を「奴隷にする」、六節の名詞 'bdh を「奴隷の身分」と訳している。エジプトを「奴隷の家」(申五・六、六・一二、出一三・三・一四、二〇・二)と呼び、そこで奴隷であった(申五・一五、六・二一、七・八、八・一四)というのは申命記史家の立場である。六・五—六の属す祭司文書はエジプト滞在の関連で「奴隷」という名詞を使っておらず、エジプトで奴隷であったという理解を示していないので、'bd ヒフィル形のもうひとつの意味「働かす、こき使う」の方

がここの訳としてよい。新共同訳自身が一・一三（P）で同じ動詞の同じ形を「酷使し」と訳している。こうなると当該箇所の帰属資料の思想にまで立ち入らないと的確な訳が出来ないということになる。上述のベヘーマー（九・二二―二九）の場合も同様であった。

一七・七ではイスラエルの人々が争った相手が誰であるか言われてないが、新共同訳はそれをモーセと特定し、一定の解釈を下している。

その他論ずべき点はまだ残っているが、以上の検討を全般的にまとめると次のようになる。（一）口語訳より新共同訳がよいとは一概に言えない。（二）日本語としてなめらかにするという原則が重んじられるあまり、原文にないものが補われたり、原文の一部が省略され、原文の特徴的文体が消えてしまっている。（三）翻訳はテクストの語、文、前後関係、段落さらには文書資料の解釈を離れてありえない。どう解釈するかは最終的には訳者が決定しなければならないのだから、各書の責任者を明らかにした方がよいと思う。

解釈と翻訳がうまく結びついた例を最後にひとつあげておこう。それはルツ記である。これは故左近淑氏によると推定されるが、ご自身の研究(The Book of Ruth, AJBI 4, 1978, 2-22)を踏まえており、各場面の雰囲気までも伝わってくるような訳であり、また出版が計画されている注解のサンプル原稿を読んだとき、内容に即した注解がそのままルツ記の神学的内容を伝えるものとなっていて感心したものである。

口語訳＝聖書　改訳、日本聖書協会　一九五五年
関根訳＝旧約聖書　出エジプト記、関根正雄訳、岩波文庫　一九六九年
ルター訳＝Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers, in den Jahren 1957-1984 überarbeitet, 1985 Deutsch Bibelgesellschaft Stuttgart.

注

(1) ルツ記は諸書に入るが、「文学書」の方で考察の対象としないとのことなので、こちらで取り上げる。
(2) 以下で出エジプト記から箇所をあげる際には「出」をつけない。
(3) 「新共同訳聖書」批評覚書(1)、福岡女学院大学紀要　第一号　一九九一年、三〇一―三二二頁。